

松川浦における幼稚魚調査と漁獲加入の状況

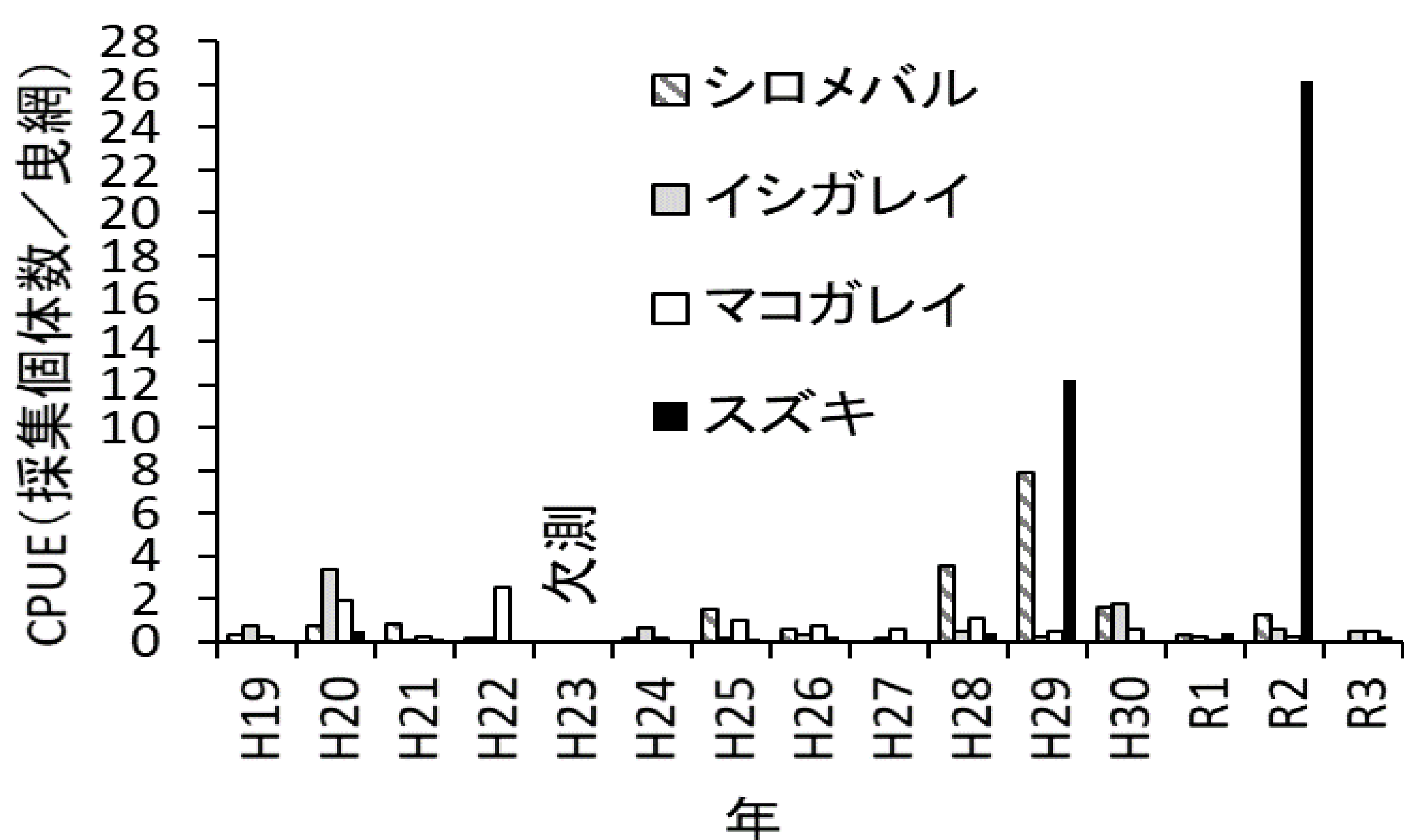
1. 背景

水産資源は、自然の再生産システムの中で成長し、世代交代を繰り返す資源です。適正に管理することで、持続的に利用することができます。水産資源研究所では、水産生物の生息場として重要な松川浦において、幼稚魚の発生状況調査を行い、今後、資源がどの程度増える(減る)のか、漁獲サイズも含めて予測することで、有効な利用方法の検討を行っています。

2. 材料と方法

松川浦を幼稚魚期の生息場とする水産有用魚種について、主な生息時期である6～10月に、浦内の6調査定点でビームトロール(桁網)を用いた調査を行いました。得られた結果から、年別、魚種別の採集密度を比較しました。また、市場での水揚物調査結果、操業日誌データ及び漁獲統計との比較検討を行いました。

3. 結果



※6～10月調査合計(H28は6～9月、H29は6～8月、H30年は5月実施)

図1 松川浦における当歳魚採集密度の推移

- 平成29年生まれのシロメバル、スズキと令和2年生まれのスズキの採集密度(CPUE)が高く、漁獲量の増加が期待されました。

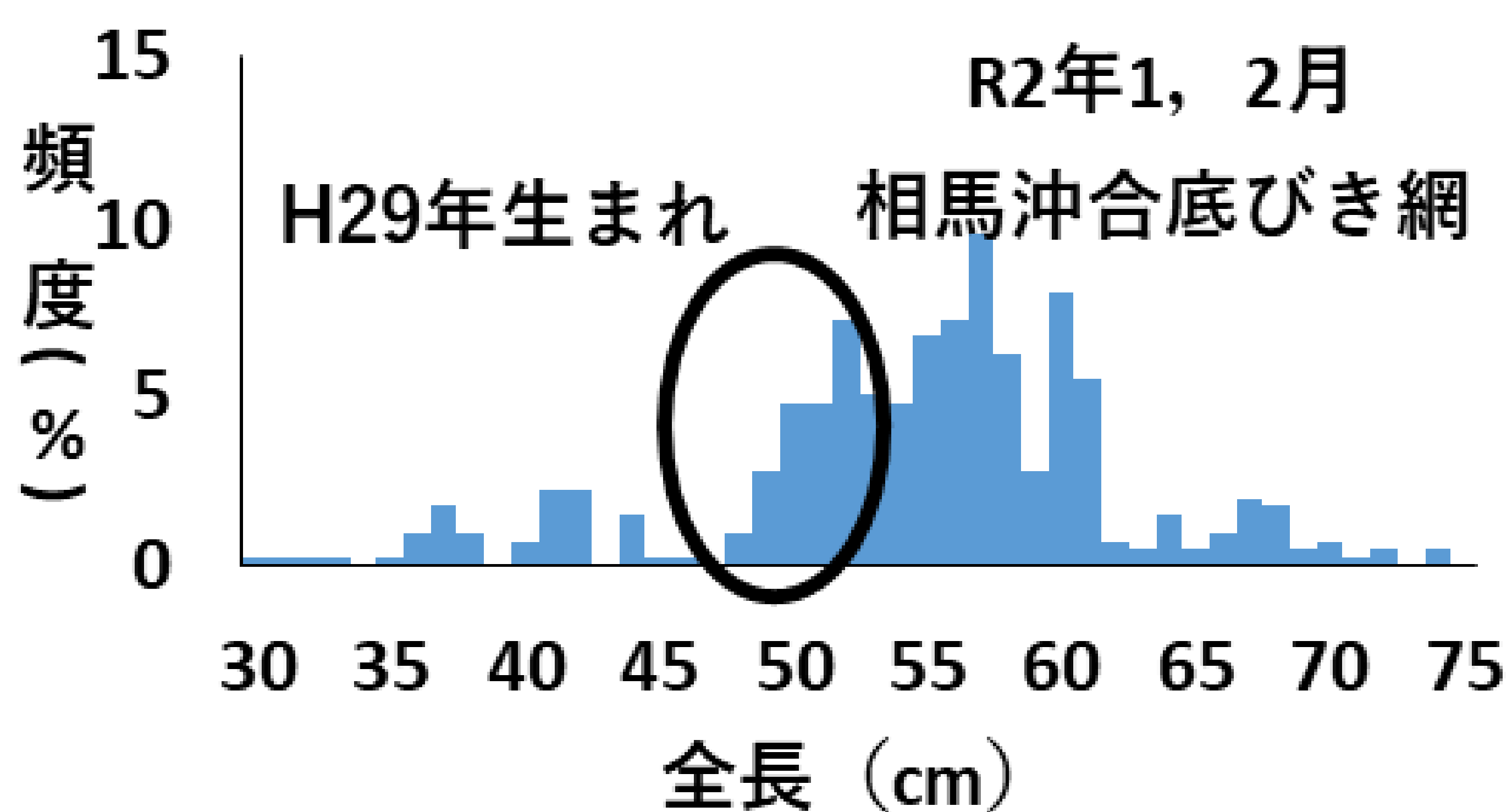


図3 スズキ漁獲魚の全長組成

- スズキは、採集密度が高かった平成29年生まれが令和2年1月に漁獲加入し、漁獲量が増加しました。

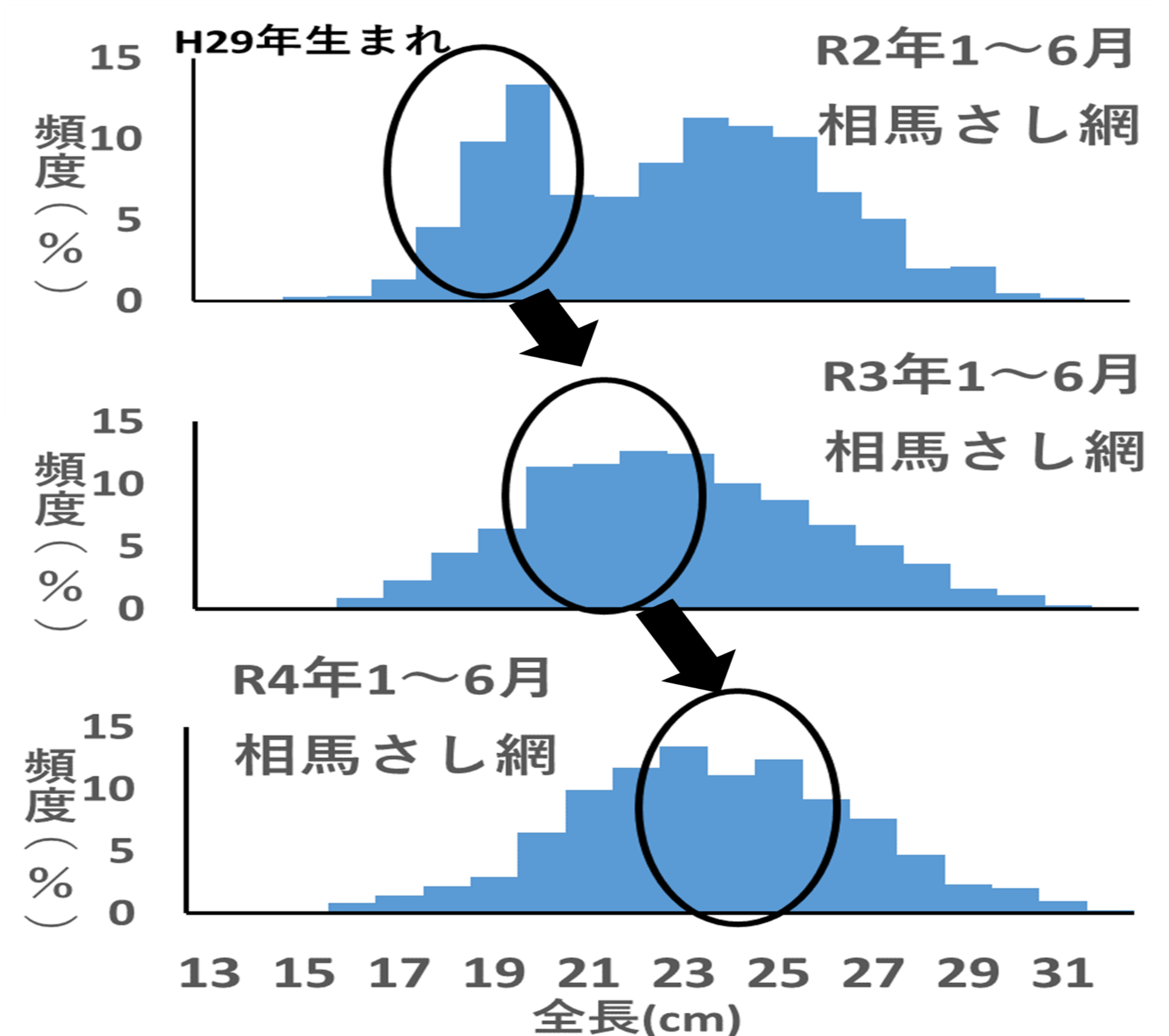


図2 シロメバル漁獲魚の全長組成

- シロメバルは、採集密度が高かった平成29年生まれが令和2年1月頃から漁獲され始め、漁獲量増加に寄与していることが確認されました。

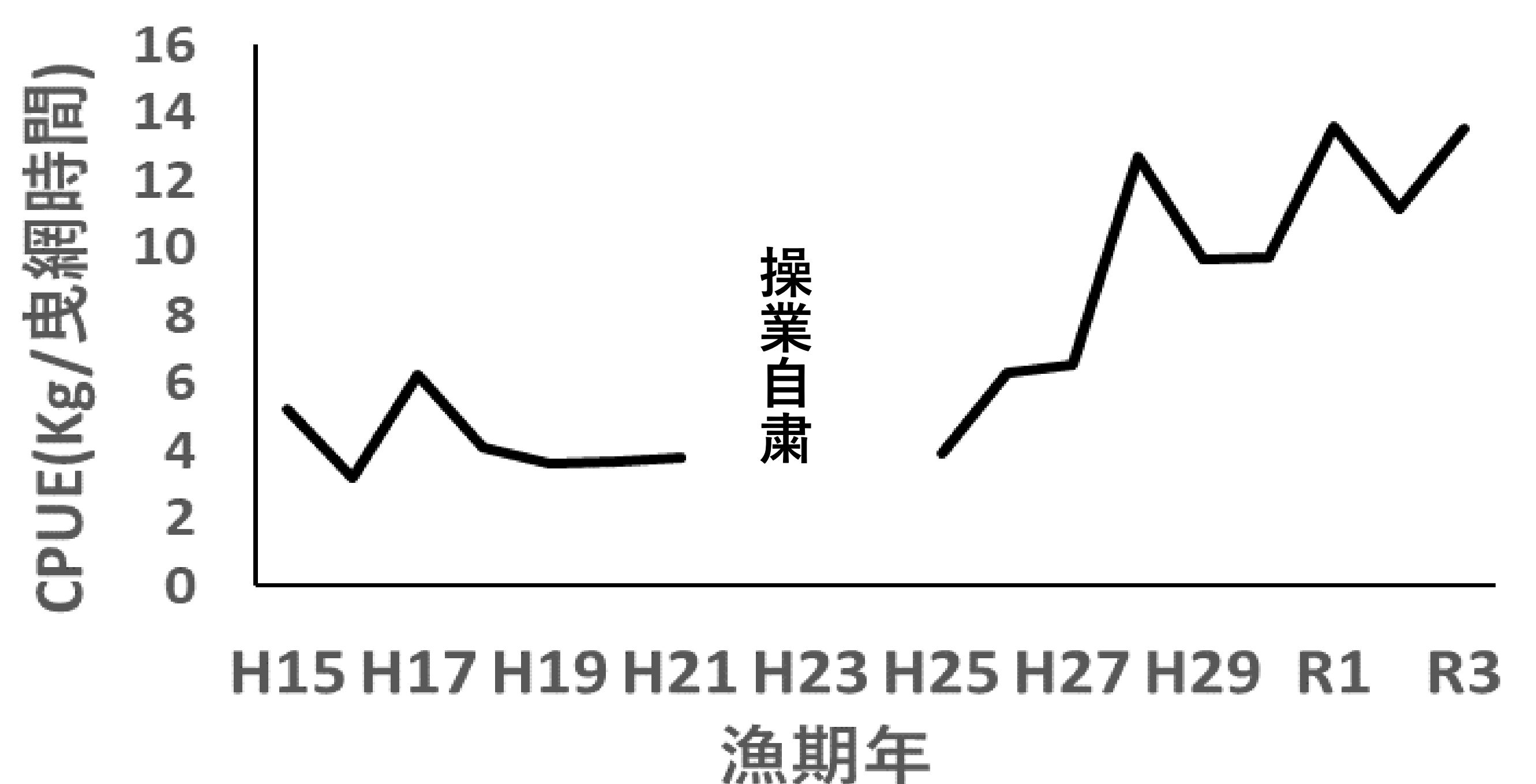


図4 スズキの底びき網漁業のCPUE

- スズキは、底びき網漁業でのCPUE(曳網1時間あたり漁獲量)も増加しており、今後は、令和2年生まれも漁獲加入し、良好な漁獲が続くと期待されます。

4. まとめ

松川浦における幼稚魚の採集状況から、今後の漁獲量やサイズがある程度予測できることから、幼稚魚調査結果を基に水揚物の追跡調査を実施するとともに、資源動向を注視し、適切な利用につなげていく必要があります。